

# 幼稚園の保護者たちが自閉症の診断を受けた幼児と 母親に共感し愛着を抱くまでのプロセス ——幼稚園のクラス運営における保護者の重要性——

三島 秀晃<sup>1)</sup>・久保田 健夫<sup>2)</sup>

1) 帝京短期大学 2) 聖徳大学

## 【抄録】

**【問題・目的】** 特別な支援を必要とする幼児に対しての合理的配慮を細やかに行うように示されたことを受け、障がい児を健常児と共に育てるという概念が、幼児教育においても取り入れられ始めた<sup>1)</sup>。このような良好な関係性を築くことができれば、障がい児の在籍するクラスの良い運営が可能になると考え、良好な関係性構築の要因と過程を明らかにしてみたいと考えたのが本研究の動機である。具体的には、知的障がいの診断を受けた幼児とその母親に対してクラスメイトの保護者がどのようなプロセスを経て理解し、共感するに至ったかを明らかにすることが本研究の目的である。

**【方法】** インクルーシブ教育を実践している幼児教育現場において、「クラスメイトの幼児が主体的かつ好意的に関わった要因を保護者がどう感じ、理解したり共感していったのか」についてX児クラスメイト34名のうち特に自閉症児と親しいと思われた5名を抽出しその保護者5名に半構造化インタビューを行った。さらにインタビューで得られた語りの記録に対しSCAT分析<sup>2) 3)</sup>を行い、コーディング表を作成して構成概念として導きだし、図式化した。

**【結果】** SCAT分析で得られた構成概念から、5名のクラスメイトの保護者が、X児とその保護者に対して抱く感情の変化を解析した結果、(第1期)母子との出会い、(第2期)我が子を通じた母子の受け入れ(第3期)母子を通じた我が子の成長の認識、(第4期)母子への共感と愛着の4期に分けられ、それぞれの時期で保護者の感情が「特別な支援に対する違和感」、「我が子とX児の良好な関係理解」、「X児に対する感激の気持ち」、「親子に対する共感」と変化していったことが判明した。

**【考察】** 保護者たちが障害児とその親に寄り添い、愛着も感じるようになったプロセスが明らかになった。本研究は、我々が知る限り、障害児とその母親に対する保護者の感情変化のプロセスを明らかにした最初の研究と思われた。本研究で明らかにされた4期の出会いから共感と愛着に至るまでのそれぞれの要素は、障害児のいるクラスを担当する幼稚園教諭に対し、良好なクラス運営を行なっていく上での有用な情報に提供するものと思われた。

**【キーワード】** インクルーシブ保育、自閉症児、共感、保護者、クラス運営

## I. 問題・目的

近年、インクルーシブやノーマライゼーションという言葉が教育の場において重要視されるようになり、幼児教育や保育の現場においても特別な支援を必要とする子どもに対して合理的な配慮を行うことが求められるようになった<sup>1)</sup>。

一方、小山<sup>4)</sup>は、良好なインクルーシブ保育の実現のためには、保育者がクラスメイトの保護者に対し特別な支援を必要とする子どもの理

解を十分に促すことが重要であるとの見解を述べた。具体的には、健常な子ども中心の保育プログラムに特別な支援を必要とする子どもを参加させるのではなく、特別な支援を必要とする子どもも参加できるものに保育プログラムを変えて、これに参加できるようにし、その様子をクラスメイトの保護者に伝えることが、特別な支援を必要とする子どもとクラスメイトの良好な関係の構築に繋がること示したものであった。また抵抗感を持つことなく幼稚園の行事に参加

し、自身の持てる力を発揮できるようにするために、特別な支援を必要とする子ども一人ひとりの特性や個性を踏まえた工夫をすること<sup>5)</sup>や、通常の幼稚園での生活における遊びや食事に特別な支援を必要とする子ども一人ひとりに工夫した配慮を行うこと<sup>6)</sup>でクラスメイトの保護者たちにおける特別な支援を必要とする子どもと保育を受けることのネガティブなイメージを低減させる実践が報告されてきた。しかしながら、クラスメイトの保護者たちからの健常な我が子と障がいのある子どもと統合保育に対するネガティブな見方の低減を図るといった消極的な工夫ではなく、より積極的に保護者たちが、障がいのある子どもの姿に共感し、自分の子どもと一緒に保育を受けることの意義や喜びを見出してくれるような保育の実践例の報告はないと思われた。

このような背景の下、われわれは担当したクラスにおいて、医療機関において「知的障がいを伴う自閉症」と診断された園児（以下、自閉症児と記す）と健常なクラスメイトが良好な関係を構築していった経験を持った。具体的には、自閉症児に健常児のクラスメイトが自分たちから積極的に関わり、両者の間にトラブルが起きても子どもたち自らで解決し、保護者同士の問題に発展することはなく、良好な関係が構築、維持され、良好なクラス運営が可能となった経験をした。その土台には、クラスメイトの保護者たちが温かく自閉症児とその母親に関わっていたことが考えられた。

以上をふまえ、本研究の目的は、特別な支援を必要とする子どもとクラスメイト、その子どもの親とクラスメイトの保護者たちのいずれもが良好な関係性を築いて良好なクラスづくりを可能にする要素を明確にするために、クラスメイトの保護者へのインタビューから得られた語りを質的データ手法で分析し、どのような過程を経て自閉症児とその母親を理解し共感し、最終的に愛着を持つに至ったか、その要素とプロセスを明らかにすることである。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

私立 A 幼稚園 5 歳児クラスに在籍する医療機関で「知的障がいを伴う自閉症」と診断された

男児 (X 児) とそのクラスメイト 5 名の母親 (クラスメイト O の母親 A, クラスメイト P の母親 B, クラスメイト Q の母親 C, クラスメイト R の母親 D, クラスメイト S の母親 E)

### 2. 調査時期

A 幼稚園において 2019 年 7 月 2 日～2019 年 12 月 31 日の間に実施した。

### 3. 調査内容

5 名の保護者 (A, B, C, D, E) に対するインタビューから得られた語りを、文字データ化し、得られた文字データを SCAT (steps for coding and theorization)<sup>2)</sup> 分析にかけ、さらに SCAT 分析によって得られた概念名を基に概念図を作成する<sup>7)</sup>。これにより 5 名の保護者が X 児とその母親を理解し寄り添っていく上でどのような要因や変化があったかを明らかにする。

SCAT 分析においては、大谷<sup>3)</sup>によって提唱された質的データ分析のための手法に基づいて、①セグメント化した言語記述 (インタビューの記録) の中から注目すべき語句を選び、②この語句を一般的な用語に言い換え、③これを説明するようなテキスト外の概念に変え、さらに④前後や全体の文脈を考慮してこの概念を構成化する、という 4 つのステップを用いてデータのコーディングを行い、言語記録から潜在的な意味を抽出し、構成概念を構築することでストーリーラインとして言語記述を可視化し<sup>2)</sup>、図式化した<sup>8)</sup>。なお 1 人ひとりの語りを詳細に分析し得られた情報を統合するのに、荒川・安田・サトウ<sup>7)</sup>は適正なインタビュー対象者数を 4 ± 1 人であると述べていることから、調査対象の保護者の数を 5 名とした。

### 4. 倫理的配慮

(1) 幼稚園の責任者に本研究の内容を説明した上で、書面で本研究の実施の同意を得た。調査は匿名で行い結果は学術的目的以外には使用しないという内容を研究協力依頼分の中で明記し、調査対象者から書面にて同意を得ている。

(2) 本研究は、聖徳大学ヒューマンスタディーに関する倫理委員会の承認を得て行った (聖大総第 259 号)。なお調査期間は 2019 年 7 月 2 日 (聖徳大学ヒューマンスタディーに関する倫理委員会承認日) から 2019 年 12 月 31 日までとして

いる。

### Ⅲ. 結果

#### 1. クラスメイトの保護者の感情の変化

##### (1) SCAT 分析

インタビューの語りの内容を SCAT 法で分析し、保護者の語りから導きだされたコーディング、構成概念、並びにストーリーラインを表に示した。このうち「X 君に何らかの障がいがあることはご存じでしたか？もしくはそうかなと思うことはありましたか？」の質問に対するものは Table 1 に、「お子様と X 君のことについて話したことはありますか？」そして、ある場合「その際子どもたちの様子はどの様な感じでしたか？」質問に対するものは Table 2 に、「保護者の方から見て、参観日や運動会などで X 君に対してどの様な印象をうけましたか？」の質問に対するものは Table 3 に示した。

##### (2) 保護者の感情変化をプロセス

SCAT 分析で得られた構成概念から、5 名のクラスメイトの保護者が、X 児とその保護者に対して抱く感情における時間的変化を検討した。

その結果、(第 1 期) 母子と出会った時期、(第 2 期) 我が子を通じて母子を理解して受け入れていく時期、(第 3 期) 母子を通じて我が子の変化や成長を感じた時期、(第 4 期) 母子に共感し愛着を抱いていく時期の 4 期に分けられることがわかった。

具体的には第 1 期では「入園時に X 児対しての特別な配慮に違和感」を感じ、第 2 期では「我が子が X 児と親密な関係になっていること」を知り、第 3 期では行事等をきっかけに「X 児の頑張りに感激を覚える」ようになり、そして第 4 期では「X 児が我が子のように感じられ、その結果親子に共感するに至る」感情の変化がクラスメイトの保護者の中に生じていったことが判明した (Figure 1)。

さらに「X 児とその母親に対する共感度を上昇させる要因」として、第 1 期 (母子との出会いの時期) では「楽しそうに毎日 X 児の話をする我が子」、第 2 期 (我が子を通じて母子を知り理解し受け入れていく時期) では「X 児に嘸まれたにも関わらずその子を肯定する我が子」や「X 児とクラスメイトの様子を知らせるコメント付きの写真展示」、第 3 期 (母子を通じて我が子の変化や成長を感じる時期) においては「保

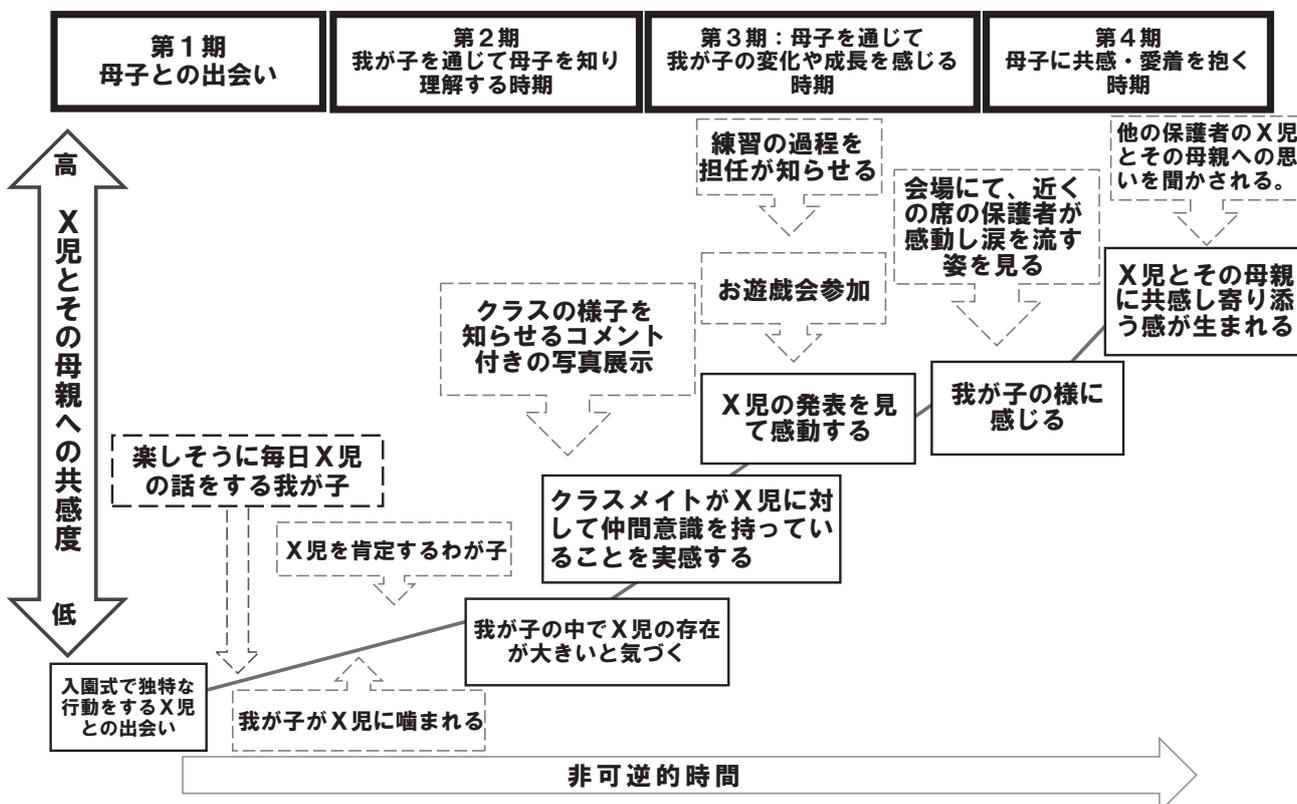


Figure 1. クラスメイトの保護者が、X 児と母親に共感・愛着を抱くまでのプロセス

護者が実際に運動会や、お遊戯会に参加することによって子どもたちの関わり合いの実際を知る」や「練習の過程を担当が知らせる」が、第4期（母子に共感し愛着を抱く時期）では「他の保護者がX児の頑張りに涙を流す姿を見る」や「その保護者と感動を共感する」が抽出された。

#### IV. 考察

近年、特別支援の考え方が広まり、教育だけでなく保育の現場でも子どもたち一人ひとりに応じた「合理的配慮」が求められるようになった。そのような中、発達障がい診断を受ける児が急増してきた。

一方、盲や聾を有する幼児に対する特別支援学校の幼稚部は用意されているものの、発達障がい児を受け入れる特別支援学校の幼稚部は我が国にはほとんどない。したがって、発達障がいの受け入れは民間の保育所や幼稚園になっている。しかしながら民間の保育機関は発達障害児に対し個別に指導を担当する職員を雇用する余裕がないのが現状であり、発達障害児の受入がうまくいくかどうかは担任の力量にかかっているのが実情である。

このような中、我々は知的障がいを伴う自閉症児を受け入れ、3年間の充実した保育をその子に提供できた事例を経験した。その経験を分析し充実した保育を提供できた要因を明らかにしておくことが今後役立つものと考え、本質的研究を行った。

その結果、障害児が充実した園生活を送ることができた要素として良好な人的環境、とりわけ障害児のクラスメイトの背後にある保護者という人的環境であった。従来、クラスメイトや担任となった教員に焦点を当てた障害児の受け入れに関する研究の報告はあった<sup>4)</sup>。その研究は健常児とともに障がい児も参加できる保育プログラムや活動のやり方を考案し、これにより健常児と障害児がともに楽しく円滑に保育ができることを報告したものがあった<sup>4)</sup>。このようなプログラムの実施と周りのクラスメイトやその保護者の理解と協力、さらには共感を得ることの保育を実践できれば、障害児のための特別な人員配置なしでも充実した円滑な保育を行うことができると考えられた。

また、「障がいを有する子どもへの配慮はその

周りのクラスメイト全員の活動に対する意欲につながること」や「みんなと一緒にひとつのことに参加することの素晴らしさ」を報告した研究もあった<sup>5)</sup>。このような点は本研究が対象とした障害児と健常児にも見ることができた。

ところで本研究では対象の障がい児の健常児との良好な関係構築過程を3年間にわたって調査をした。3年間という長期の過程を明らかにした研究は調べた限りなかった。筆者がこのような長期研究が実施できた理由として、「3年間の教育期間において、自閉症を有する児とその保護者、周りの幼児とその保護者を一番身近にいる幼稚園教諭として毎日関わり、その変化の過程を記録できたこと」、「3年間の交流を経て保護者と担任の間に信頼関係を構築することができ、インタビューに協力していただき、率直な言葉を引き出すことができたこと」が考えられた。

また本研究では、知的障がいを伴う自閉症を有する幼児のクラスメイト5名の保護者に対するインタビューを行いその記録を質的に分析した。その結果、5名の保護者の語った内容は様々であったにもかかわらず「共感」というキーワードが抽出され、5名の親がいずれも自閉症児と母親に共感を覚えて接していたことが明らかにされた。これは定量研究では得られない質的研究の成果であり、コーディング表によって概念化の上に得られた、研究者の主観や恣意的な解釈が入らない、客観的な結果であると考えられた<sup>3)</sup>。

我々はクラスメイトの保護者たちが障がい児とその親に寄り添い、障がい児に対しては愛着も感じるようになったプロセスを質的研究手法を用いて明らかにした。このような保育期間における障害児に対する感情変化の過程を質的研究手法を用いて明らかにした研究は我々が知る限りなくこれまでなく、本研究が最初であると思われる。

本研究で抽出された入園時の出会いから共感と愛着に至るまでの過程の要素（障がい児にとって良い要素もそうでない要素も含めて）は、今後、幼稚園教諭が障がい児を担当する際に、保育期間の場面場面において、有用な情報を提供するものと思われた。

## V. おわりに

本研究を通じて、「クラス担任としてX児とその保護者に主体的に関わろうとし、そのX児に寄り添うクラスメイトとその保護者に会い」、「担任を務めた1年間で、クラスメイトとその保護者が、通常では考えられない程のソーシャルスキルを身に着けていったこと」を実感した。その実現の背景には、言語をほとんど使用しないX児に対してクラスメイトたちがコミュニケーションを取ろうとさまざまな方法を試行錯誤し、「X児の喜ぶこと」や「一緒に遊ぶことの楽しさをどう伝えていけば良いか」を共に楽しく見出していく過程は、人格形成にとって重要な幼児期において、かけがえのないものであったと考えられる。これと並行してX児自身も、笑顔を見せたり、奇声ではなく穏やかな声でクラスメイトと楽しさを共有できることを学ぶことが出来ていったと思われた。

これから共生社会を創っていく子どもたちにとって、障がいだけでなく、国籍、文化、性別が自分と異なる人間に出会った際に、拒否するのではなくその人を理解しようとし、「どうすれば互いに良好な関係を築くことができるか」を考えようとする力を幼少期につけることは非常に重要と思われる。そのために、幼稚園や保育所、こども園において、保育者は「園児たちが『多様な個性』を認めて受け入れることができるような」合理的配慮を実践していく必要があると考えた。

このような実践を幼稚園教諭や保育士だけで行うことは容易ではない。自分自身も本研究に取り組むまで、特別な支援を必要とする幼児とクラスメイトたちの良好な関係の構築を担うのは、幼稚園教諭や保育士の役割りだと思い込んでいた。しかし、クラスメイトたちの特別な支援を必要とする幼児に対する自主的な働きかけに気づき、さらにその子どもたちの保護者の方々に支えられ、幼稚園教諭である担任の自分だけでなく、特別な支援を必要とする幼児を取り巻く皆が一丸となることによってはじめて児とクラスメイトの良好な関係、すなわちインクルーシブな環境が創られ、インクルーシブ保育が実現できる事を実感した。

インクルーシブ保育の実現に向けての要素を分析した本研究が、インクルーシブ保育の発展

に少しでも寄与するものとなれば幸いである。

### 【謝辞】

本研究にあたり、質問に応じてくださいました保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。又ご協力いただきました幼稚園の教職員の皆様、並びに聖徳大学大学院教職研究科の先生方に感謝申し上げます。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館, 124-128
- 2) 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方ー研究方法論から SCAT による分析まで 名古屋大学出版会, 278-290
- 3) 大谷尚 (2007) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54 (2), 27-44
- 4) 小山望 (2011) インクルーシブ保育における自閉的な幼児と健常児の社会的相互作用についての一考察 人間関係学研究, 17 (2), 13-15
- 5) 勝木洋子・森川紅 (1997) 園行事うんどうかいの検討ー障がいをもつ子どもたち (障がい児通園施設) の事例ー日本保育学会大会研究論文集 50, 500-501
- 6) 寺島明子・大野和男・青柳静花・横山いずみ (2007) 高機能自閉症児を担当する5年目の保育士における子どもへの関りと支援 松本短期大学研究紀要, 69-82.
- 7) 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線経路・等至性モデルの TEM 図 の書き方の一例 立命館人間科学研究 25, 95-107
- 8) 秋田喜代美・藤江康彦 (2019) これからの質的研究法ー15の事例にみる学校教育実践研究 東京

Table 1. クラスメイトの保護者へのインタビューコーディング 1-1

発話者	テ ク ス ト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言い換え	<3> 左を説明するような テキスト外 の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
1 聞き手	X君に何らかの症状があることはご存じでしたか。もしくはそうかなと思うことはありましたか。					
2 保護者A	入園式の時に最初子ども達写真撮影した時、毎年何人かはお母さんが抱っこしていないと写真に写れなくて、その時に、まあ何人か(そういう子)がいて、Xちゃんもそうだったのかな？ずっとお母さんにべったりで、ただ周りの子はそっちに行きたくないみたいなき感じでお母さんにべったりだったんだけど、Xちゃんは全然普通な感じでお母さんに抱っこされていたのを見て、私は第一印象最初そこで…「ん…」って。あんまり緊張もしてないし、あれかな…ってゆうのだけが…ほんとにふわっとしか感じなかったんですけど、そういうのが一番最初にありましたね。	入園式/第一印象 / 「ん…」って	幼稚園生活の最初 / クラスの顔合わせ / X児の症状への気づき	母子分離の際に見られたX児の特性	同年代の子どもとは違う行動に対する違和感	自閉症を含む特別な支援を必要とする子どもの特性を、様々な情報源から保護者はどの程度認識しているのだろうか
3 保護者B	それを聞いていたから、うん、そうそこから「あ。そんな子いたんだ」だった感じ。	それを聞いていたから / そんな子いたんだ	保護者同士での会話 / 自閉症の診断を受けている子	自閉症を有する児が息子の幼稚園にいることを知るきっかけ	X児が特別な支援を必要とすることへの気づき	保護者は自閉症を有するX児と同じクラスであることをどう感じていたのだろうか
4 保護者A	最初Oが、遠足…後位ですかね、ふっと「Xちゃんはまだね、おしゃべりができないんだよって教えてもらって」。「あっそうなの、何で」って聞いたら「ん…わかんない」みたいな感じだったんですけど。何回か。でもXちゃんはニコニコしてる。とか。OはXちゃん大好きだったから。「今日はこうやった(ジェスチャー)」とか。、私はもしかそれで何かあるのかもな…って。その後の2学期にお母様から自閉症であると聞かされて。あーそうか。	教えてもらって / OはXちゃん大好きだったから / 今日はこうやった / 何かあるのかな / 自閉症	子どもからの報告 / 娘の好きな友だち / 支援が必要なの / 子の存在	娘の大好きな友だちが有する障がいへの気づき	園での楽しい体験談を伝えるには欠かせないX児の様子	我が子がX児に対して批判的な言動をしていた場合はどうなっていただろう
5 保護者C	うちは、年長になって初めて一緒にクラスになって、毎日帰ってくるなり、「今日Xちゃんと遊んだんだ」って。毎日毎日、Xちゃんの名前しかでなかったんです。で、何か顔に傷をつけてくる事が最初の多かったんです。本人は何も言わなで、私が聞くことが結構あったんです。「ちょっとXちゃんがギューってしたの」っていうのを聞いて、ただ直接お会いした事もなく。遠足の時に初めてXちゃんに、お母さんと一緒にいる状態でお会いして、その時先生とお母さんとXちゃんとお話してる時のXちゃんの行動を見て、支援が必要なお子さんなのかなって思い、何かQが先生と写真を撮りたいって言うとお声掛けした時に、ちょっと傷を作ってくる事と、あの子がXちゃんなんだなって見た直後だったんですけど、あえて先生にQからそうやって聞くんですけど、「逆に娘がXちゃんに対して、何か行動を起こしてやりあった傷とかではないですか」って一度確認した事があったんですけど、「そういう訳ではないんです」ってお話を聞く事ができて。何かしら支援が必要で、そういう事になってるんだなって改めて認識した感じなんです。	毎日毎日毎日毎日 / Xちゃんの名前しか出なかった / 何かしら支援が必要	娘の強い思い / 特定の気になる存在 / 障がい	娘の怪我から感じたX児への疑問 / 怪我をさせられても一緒に遊びたい感情	娘の中で存在が大きいと考えられるX児の存在の実態	保護者Dは保育士であることもあり、娘からのX児に対する肯定的な言動から、様子を見たり、担任に自然と現状の確認をしてくれていたが、自閉症などに全く知識のない保護者であった場合同じ様に理解をしようとしてくれたらどうか

Table 2. クラスメイトの保護者へのインタビューコーディング 1-2

発話者	テ ク ス ト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言い換え	<3> 左を説明するような テキスト外の内容	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
6 保護者D	息子が年長の初めにX君に噛まれたことがあり、幼稚園生だからということもあるのかなと思ったが、参観日や、行事の際に担任が傍に必ずついていたのでそうなのかなと感じたことはあります。	行事の際/担任が必ず傍について	普段とは違う/幼稚園行事/特別な支援が必要	非日常的环境に戸惑う自閉症児の特性	危険を回避する為の教師の配慮から気づく自閉的症状	特別な支援は周囲の保護者にどういった印象を与えるのか
7 保護者E	知っていたのは年少の時にちょっと担任の先生が付っきりしているなっていうのを他のママさんから聞いて、その時はまだグレーだっていうことはわかっていなかったんですね？いるなっていうことはわかってました。	年少の時/先生が付っきり	幼稚園生活一年目/教師による特別な支援が必要	園生活の中で感じられるX児の特性	年少時に担任の行動から感じられるX児への特別な支援体制	年少時クラスが同じだった場合はまた違った反応があったのだろうか
ストーリーライン	入園式でX児を見て、同年代の子もとは違う行動に対する違和感を感じる。そういった様子と、ほかの保護者との会話の中でX児が特別な支援を必要とすることへの気づきにつながる。しかし、我が子が家庭内で話す園での楽しい体験談を伝えるには欠かせないX児の様子から、我が子の中で存在が大きと考えられるX児の実態を日々知ることになる。その他にも参観や行事の際にクラスの様子を見ると、危険を回避するための教師の配慮から気づく自閉的症状や年少時に担任の行動から感じられたX児への特別な支援体制からX児が何らかの障がいを持っていることを知ることになる。					
理論記述	・入園式という同じ年齢で同じ状況の幼児が大勢いる中で、ひときわ目を引く行動をするX児に出会う。/・X児と同じクラスの保護者と会話をする中でなんらかの障がいを有しているのではないかと感じる。/・しかし我が子からX児の様子を主体的に楽しそうに話すことが多く興味がわく/・参観日や園の行事などで実際にクラスの様子を見ると、教師の合理的配慮や、特別な支援体制を知りX児が特別な支援を必要とする幼児であることを確認を持つ。					
さらに追及すべき点・課題	・保護者が感じた疑問や、気づきの中に不安は含まれていなかったのか。/自閉症を含む特別な支援を必要とする子どもの特性を、様々な情報源から保護者はどの程度認識しているのだろうか。/我が子がX児に対して批判的な言動をしていた場合は担任を中心とした教師が細やかなサポートをする必要があったのだろうか。/・特別な支援をしている状況は加配教諭がない実態から保護者にどういった印象を与えていたのだろうか。/					

Table 3. クラスメイトの保護者へのインタビューコーディング 2-1

発話者	テク ス ト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言いかえ	<3> 左を説明するような テキスト外の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
〜 1 〜 手	聴 き 手 お子様とX君のことについて話したことはありますか。そして、ある場合その時の子どもたちの様子はどんな感じでしたか					
〜 2 〜 保 護 者 D	日常の会話の中で、X君の話が息子からよくでていた。X君が特別な支援が必要な子だからではなく、幼稚園の話 naturally している様子。特にX君に対する疑問などは私には無かった。なので、不安も疑問もX君に対して感じなかったが、Rがこんなに優しいんだと感じた。	X君の話/息子からよく/不安も疑問も/感じなかった/優しいんだと感じた	家庭での会話/主体的に/受け入れられる/息子の思いやる姿勢	X児に対する息子の寄り添う姿勢から気づく優しい一面	X児との関わりから見出された我が子の優しさ	R児のX児への興味のきっかけは何か
〜 3 〜 保 護 者 E	Xちゃんが出てきたのは、年中の初めごろに「Xちゃんてゆうんだよ。Xちゃんはいつもチョリースっていうんだよ。チョリースしか言わないんだよ。年中の時です。で、Sはいつも廊下でXちゃんを追いかけてるんだ」って。不思議だなんて言っていました。んー… 幼稚園では担任の先生に「Xちゃんは大きくなったらどうなるの?」とか聞いたりしていたんですよね? 家ではそういうことは全く聞くこともなく、「Xちゃんはお友だち。みんなと一緒に」って言っていました。	廊下でXちゃんを追いかけてる大きくなったらどうなるの?/みんなと一緒に	息子にとって気になる存在/X児の将来についての疑問と不安	年長児なりに感じるX児と同級生との違い/興味を引く行動を起こすX児への思い	放っておくことのできない存在	普段からX児に対して適切な支援を行い、頼られていたS児の姿は家庭環境が要因としてあるのではないだろうか
〜 4 〜 保 護 者 B	息子は年中で一緒になって、「Xちゃんと遊んだ」が多くて、で、預り(保育)かな? 何かした時にXちゃんがいて、ママもいて、もうPが追い掛け回してる感じ。で、Xちゃんが好きで、何か逆に負担になってないかなって凄く思ってたけど、PはXちゃん大好きで。面倒を見たいって。自分のことでできないのに、Xちゃんのお手伝いをやってるんだよっていうのを担任の先生に聞いてて、あー、あの子なんだみたい。だからPは凄く好きで。別に多分違う目では見てないっていうか。普通で。ただ、お弁当がクッキーとかだから「いいなあ」とか。そういう…ははは…	面倒を見たい/違う目では見ていない	寄り添う姿勢/世話をしたい/手伝いたい/主体性/自分と同じ	相手を引き付けるX児の魅力/子ども同士の自然なやり取りを保証される環境	X児と自身とを重ね力になろうとする姿勢	母親同士あまり接点を持たずとも理解できる理由は何だろう
〜 5 〜 保 護 者 C	うちも言った、あははは	うちも	同じ	他者が発言することによって再確認されるX児と娘の関係性	幼稚園生活を振り返り、思い返される我が子とX児との関わり	インタビューの際意見が違った場合言えない環境ではないだろうか
〜 6 〜 保 護 者 A	あははは、うちも言った	うちも	同じ	他者が発言することによって再確認されるX児と娘の関係性	幼稚園生活を振り返り思い返される我が子とX児との関わり	笑い声を伴うということは楽しい思い出のひとつということだろうか
〜 7 〜 聴 き 手	なるほど。逆に年中の時に「何であの子だけおやつ食べてるの」とかは出なかったんですか。					
〜 8 〜 保 護 者 B	何もなかったですねー	何もなかった	気にしていない	他者と比較しようとする意識	我が子自身に不満がないことからの他者への許容	年中の担任にも掘り下げて確認することも必要である
〜 9 〜 保 護 者 C	でも、知らせてくれたんですけどねー だけど、「Xちゃんはね、こうやってクッキーを作ってきて、で、お母さんは凄く上手なんだなーって」言っただけですけど、ずるいとかは全く無かったですねー。	凄く上手/ずるいとかは全く無かった	器用/自分は自分という意識	羨む感情を勝る程のX児への興味関心	楽しい体験談を話すには不要な羨み	各家庭において様々な理解と配慮があったことを追求することも今テーマの課題の要因のひとつである

Table 4. クラスメイトの保護者へのインタビューコーディング 2-2

発話者	テクスト	<1> テクスト中の 注目すべき語句	<2> テクスト中の 語句の言いかえ	<3> 左を説明するような テクスト外 の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
10 〜 聞き手	そのお母さんの365日毎日手作りのクッキー見たことありますか？					
11 〜 保護者C	ないです。話で凄ってのは聞いてて。	ないです	皆無	実際目の当たりにしたことがないが興味のある事柄	我が子の話から想像される母親の愛情の形	写真を見せる前に子どもから得た情報からどんなものを想像しているのかを先に確認すべきではないだろうか
12 〜 保護者A	ないんですよ	ないんですよ	皆無	実際目の当たりにしたことがないが興味のある事柄	我が子の話から想像される母親の愛情の形	写真を見せる前に子どもから得た情報からどんなものを想像しているのかを先に確認すべきではないだろうか
13 〜 聞き手	えー…っと。(手作りクッキーの写真を見せる)これとかですね。これは僕が提示したお遊戯会の衣装デザインのイラストですかね。					
14 〜 保護者A	すごーい！！	すごーい	尊敬／驚き	手間暇を考慮したうえでの驚き	同じ母親としての歓喜と賞賛	この写真を見て感じた具体的な意見を掘り下げて確認することも課題である
15 〜 保護者B	愛を感じるよね。夜かな…夜作ってんのかな。朝かな。母の愛…愛と。手をかけてるっていうか、放置をしてない感じが、多分誰も何も言わないポイントだよ	愛／母の愛／放置をしていない／誰も何も言わない	愛情／思いやり／見守る姿勢／理解されている	同じ年の子を持つ母親として感じる子育て感／子育ての重労働を知っているからこそ汲み取ることのできる愛情の深さ	多くの人に理解される要素への気づき	逆に否定的な意見も確認することも必要ではないか
16 〜 保護者A	そうそう…うん。	そうそう	共感／理解	改めて気づかされるX児の母親への尊敬の念	言語化がままならない程の驚きと尊敬の念	この尊敬の念を言語化してもらうべきである
17 〜 保護者C	うん！	うん	共感／理解	改めて気づかされるX児の母親への尊敬の念	言語化がままならない程の驚きと尊敬の念	この尊敬の念を言語化してもらうべきである
ストーリー・ライン	X児と関わる我が子を見て感じたことは、X児との関わりから見出された我が子のやさしさと、X児のことが放っておくことのできない存在だということ。X児と自身とを重ね力になるとうとする姿勢など、幼稚園生活を振り返り思い返される我が子とX児との関わり。そういった姿勢でいてくれたことは我が子自身に不満がないことからの他者への許容や、楽しい体験談を話すには不要な羨みのようなものではないか。そんな中、我が子から聞くX児の話からは、X児の母親の素晴らしさも伝わってくる。我が子の話から想像される母親の愛情の形、同じ母親としての歓喜と称賛。そして、同じ年の子をもつ母親として感じる子育て感などの共感すべき点が多く、言語化がままならない程の驚きと尊敬の念が生まれる。					
理論記述	・X児と我が子の関わりから、我が子の新たな一面に気づいたり、いかに大切な存在かを教えられた。／・そうした感情を抱いていたことは我が子自身も愛情に満たされ、誰かを蔑むような思考に至らなかったのではないか。／・そういった環境の中で、保護者にも様々な影響を与えた。それはX児に惜しみなく愛情を注ぐ母親に対しての共感と、尊敬である。					
さらに追究すべき点・課題	・幼児が様々な視点から、X児に寄り添った要因はそれぞれの家庭環境でもあるのでは／・母親同士がほとんど接点をもたない環境で何故こうまでして共感や尊敬の念を抱くことができるのか。					

Table 5. クラスメイトの保護者へのインタビューのコーディング 3-1

発言者	テク ス ト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言いかえ	<3> 左を説明するような テキスト外の内容	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
(1) 聞き手	お母さまたちから見て、参観日や運動会などでX君に対してどんな印象を受けましたか？					
(2) 保護者D	クラスを乱している印象は無い。支援は必要な子なんだと感じた。特に嫌な印象も良い印象もなかった。周囲がつきっきりでサポートすることが必要だなと感じた。Rがそういう子だったんだということを知る事ができた。なかなか勝てない運動会のリレーでX君を休ませるといった意見に対してそれは絶対に駄目だと言ったことに驚いた。そういった感情よりも勝ちたい気持ちの方が強い子だと思っていたので。その理由は単純にRがX君のことを好きだったからだと思う。好きな子には優しくするので。	支援は必要な子／X君を休ませる／絶対に駄目／勝ちたい気持ち／好きだったから	他者の助けがある／皆で出場／優勝／仲間意識	欠かすことのできないX君との仲間意識と信頼関係	X君を含め皆で勝ち取る優勝への方法の追求	このリレーの話合いこそ、保護者に見てもらわなければならない
(3) 保護者D	いとこの子どもが自閉症(中学生)なので特別な印象はなかった。ただRの話やX君のことが好きなんだなと感じた。なんでもかはわからなかったが。どういった要因があったかはわからなかったが、R自身が自分を頼りにしてくれることを喜んでX君はRが喜ぶ反応をしてきていたのかなと感じる。	自分を頼りにしてくれること／喜ぶ反応	信頼される／充実感を味わう	思いやることに対する応報への喜び	人間関係における良好な需要と供給	需要と供給は適切な表現であるのか
(4) 保護者E	いつもここにこしている印象でした。年中でXちゃんと同じクラスだったことをすっかり忘れていて、年中の担任の先生のことを話していて思い出したんですけど ははは そこまで意識せず… あっ そうだ 年中も一緒なんだったって思ったぐらいで申し訳ないんですけど…	すっかり忘れていて／思い出した／そこまで意識せず	特に心配だと感じることのない園生活／自然な環境	息子にとって特別問題意識を抱えることのないX君との園生活	現在の環境へと引き継がれているクラス編成に伴う忘却	年中時も同じクラスであったことを忘れるということは、X君を原因とした問題が生じていなかったからではないか
(5) 聞き手	いや そんな風に自然に受け入れてくれていることはこちらとしてはありがたいですよ					
(6) 保護者E	Xちゃんてみんなといても、普通にニコニコしてるし、笑顔だし、なんかSにも聞いたんですけど、「Xちゃん幼稚園でどうだった？って、なんかあったりした？」って。Sは「ううん。普通」いつも笑ってたぐらいだったりして。えっと、なんか「わー」って発狂したりとかそういうわけじゃないんでね。	普通にニコニコしてる／笑顔／普通／いつも笑ってた	楽しそうにしている／自然／笑顔／絶やさない	大人に対してX君の存在を肯定しようとする感情／X君を大切に思っているの表現	X君の特性を理解したうえで事実を肯定的に伝達しようとする言動	S君の行動は教師が行う支援に近い、高いスキルを伴うものだったのではないだろうか
(7) 保護者B	(行事で)わが子のように感動した	わが子のように感動	愛情／喜び／共感	X君に対する親心の念	X君がクラスメイトと共に一つの課題を達成したことへの歓喜	何故わが子のように感動したのか
(8) 保護者C	うんうんうんうん…私がこんな気持ちになっていいんだらうか…って思っちゃうけど…	私がこんな気持ちになっていいんだらうか	幸福感／歓喜	説明ができない程の感動や喜び	自分と同じ感情を持つ保護者と共感することによってより高まる寄り添う気持ち	
(9) 保護者A	そうそう、申し訳ないなって思いながらもわが子以上に泣いた	わが子以上に泣いた	親心／仲間意識	抑えきれない共感の念	尊敬と共感の念	
(10) 保護者C	行事を重ねるたびにね、見てて変化を感じるんだよね	行事を重ねるたびに／変化を感じる	幼稚園園生活環境／成長	娘と同じ環境で共に成長するX君に対する気づき	保護者の視点から解る幼児の成長	行事以外で変化を感じた具体的要素も確認すべきである
(11) 保護者B	そうそうそうそう、お遊戯会とかね	そうそうそうそう	共感／理解	他者と感情を共感することによって生まれる感情の高ぶり	普段とは違う環境がX君にとっていかに課題となっているかを理解した上での共感	保護者は普段の生活よりも行事の際に参観することが多いので普段の生活に関してはどう思うのだろうか
(12) 保護者A	そうそうそうそう、お遊戯会なんてね、炎と森のカーニバル(遊戯の曲名)クラスのお母さんたちみんな号泣してたよね	お母さんたちみんな号泣してた	仲間意識／寄り添い／感動	クラスの保護者が一体となり応援する関係性	教師が気づかない所で保護者同士行っていた様々な理解や協力、配慮	保護者同士で、どんな会話が行われていたのだろうか

Table 6. クラスメイトの保護者へのインタビューコーディング 3-2

発話者	テ ク ス ト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言いかえ	<3> 左を説明するような テキスト外の内容	<4> テーマ・構成概念 (前後・全体の文脈を考慮)	<5> 疑問・課題
13 C 保護者	なんだっけ、運動会(当日)の時、バトンやっていると、あ…話ちょっとそれちゃうんですけど。Qが、めっちゃくちゃ怖い顔をして、集中してるとかじゃなくて、半泣き状態でやってたんですよ。で、最初緊張してるのかわかって思ってたんですけど、どうも違うなって思って、まあ一応やりきったんですけど、帰ってから「Q、バトンの時どうしたの？」って聞いたんですよ。したら、並んでるとき、これから始まるぞっていう時に、バトン…でXちゃんが思いつき背中を“ガン”と…いったらしいんですよ…	半泣き状態/やりきった	我慢する姿/達成する力	普段とは異なる状況に対応する力が発揮された瞬間	痛みに戸惑いながらも自身で決定し、行動した決断力	教師がその出来事にその場で気づき対応できていればQ児とX児はより絆を深めることができたのではないだろうか
14 C 保護者	流石に「凄く痛かった…めっちゃくちゃ痛かった…でも、本番で、やらなくちゃいけないし、Xちゃんも一生懸命やってくれるのもわかるから…だから痛い我慢してやってた」って言うんですよ。で、あ…あんだけ嫌なものに対しては嫌だって凄く出す子なのに、ちゃんとやっぱり、自分のことが嫌いで、そういうことをしたんじゃないってことはわかっているからなのか、自分の中で、その…抑えてやりきったんだなってその時に改めて感じたんですよ。だからその、やられたことが嫌だとかっていうのは一回も無かったし、私の方から「XちゃんがそういうQのことが嫌いで、ぶったりお顔ギューってしたんじゃないんだよ」ってあえて説明とかはしたことがないんですよ。だから「何でああゆうこといっばいやってくるんだらう」とか家で言ったことも一切なかったから。あえて私の方もそういう風には言わなかったんですよ。	一生懸命やってくれるのもわかる/嫌なものに対しては嫌だって凄く言いだす子/抑えてやりきった	他者理解/素直に思いを伝える子/忍耐力	信頼関係に基づく相手を理解し課題を達成しようとする力/説明不要の親子関係	自身の痛みを差し置いての理性と自立心/我が子の言動からX児への理解、配慮に対する賞賛	保護者が娘の努力に気づき、X児を非難しなかった理由はこのテーマにつながっているのではないだろうか
15 聞き手	クラスでも基本的にその必要がほとんどなかったんですよ					
16 A 保護者	先生も？特になかったんですか？	先生も？	教師も/説明をしていない	日々の園生活の中で生まれた仲間との信頼関係	子どもたちが主体的に理解、寄り添っていた事実への驚き	そんな中でも不満や疑問を抱いていた子はいなかったのだろうか
17 聞き手	特にありませんでしたね。たまに「どうしてあげたらいいの？」とかは聞いてきたことはありましたけど、「何でああいうことするの？」っていうのは全然言わなかったですね。					
ストーリーライン	運動会のリレーでは優勝したいことはもちろん、X児を含め皆で勝ち取る優勝の方法の追求は子どもたちにとっては当たり前のことである。そう思わせる程の信頼関係を互いに構築していた要因のひとつは人間関係における良好な需要と供給でもある。保護者自身もいかに自然にX児を受け入れていたかが、いつ同じクラスかを一瞬忘れてしまうほどの現在の環境へと引き継がれているクラス編成に伴う忘却がそれを示している。園での出来事を話す際にも、X児の特性を理解したうえで事実を肯定的に伝達しようとする言動がみられる。そういった環境からも、保護者側がX児に寄り添い、思いを寄せる出来事がある。お遊戯会の発表ではX児がクラスメイトと共に一つの課題を達成したことへの歓喜や自分と同じ感情を持つ保護者と共感することによってより高まる寄り添う姿勢、そしてX児の保護者への尊敬と共感の念、X児に対しても保護者の視点から感じる幼児の成長、普段とは違う環境がX児にとっていかに課題となっているかを理解した上での共感。そういった教師が気づかない所で保護者同士行っていた様々な理解や協力、配慮がある。こういった中でももちろん彼ら自身トラブルも抱え、一人の幼児が感情のコントロールがうまくいかないX児に背中を強打されるでき事があった。しかし、行事本番ということと、それに普段以上のストレスを抱えているX児のことを理解してか、痛みに戸惑いながらも自身で決行し、行動した決断力を見せる姿もある。それは自身の痛みを差し置いての理性と自立心、我が子の言動からX児への理解、配慮に対する称賛など、新しい感情も生まれる。こういった関係性の中で子どもたちが主体的に理解、寄り添っていた事実への驚きすら感じさせられる。					
理論記述	・子どもたちはリレーで優勝をねらっている。/・X児も一緒に走ることは当然である。/・X児との関係は互いに同等であり、それでいて大切な存在である。/保護者同士も関係性を構築しているが、子どもたちのそれとはまた形の違うものである。/・A児の保護者への尊敬から共感へ変化していく。/・その後、また共感へと感情が行き来する。/					
さらに追及すべき点・課題	・年少、年中時の担任の関わり方も大きく影響している。/需要と供給という表現をもう少し具体的に表現するべきではないか。/・我が子の様に感動した要因を細かく分析する必要がある。/・行事など保護者が見られるもの以外に関してはどう感じていたのだろうか。/・すべての幼児が満足している状況とは言い切れない。/我慢や不満のため込んでいる幼児はいなかったのだろうか。					

# **A process to promote empathy and attachment among guardians towards an autistic child and the mother in a preschool:**

**—implications for the importance of guardians in class management—**

**Hideaki MISHIMA<sup>1)</sup> • Takeo KUBOTA<sup>2)</sup>**

1) Teikyo Junior College      2) Seitoku University

---

## **【abstract】**

**【Purpose】** “Inclusive education” became a common concept in preschools as well as elementary schools, in which reasonable accommodation is provided to the children who need special support education. We here report a child with autism and mental retardation (child X) who received good accommodations in the author’s class in a preschool. In this case, the classmates actively contacted to child X, so that the author successfully managed this class as a homeroom teacher. We also found that the classmates’ guardians kindly support child X and his mother and recognized that the classmates and their mothers were important factors for this successful homeroom management. Therefore, we investigated the precise process of the good relationship between the autistic child /his mother and the classmates/their guardians in the class.

**【Methods】** We performed a semi-structured interview with the guardians of five classmates, who intimately communicated with the Child X, out of 34 classmates in the author’s class and investigated the factors for the active and warm attitude of the five classmates. We also performed SCAT analysis on the records of the interview, and introduced construct by creating coding tables.

**【Results】** In this study, we investigated how guardians develop empathy for and emotional attachment to the autistic child and the child’s mother using the steps for coding and theorization (SCAT) method based on interview data from 5 mothers of typically developing classmates. We identified 4 steps and the factors that increase empathy at each step: step 1, encounter of an autistic child and the mother to classmates’ guardians via the classmates; step 2, acceptance of the autistic child by the classmates and their mothers even though the autistic child bites his classmates; step 3, the guardians’ recognition of growth and development of their children through communication with the autistic child, especially during Sports Day and Parent’s Day; and step 4, formation of empathy for and attachment to the autistic child and the mother via a strong impression of laudable activity of the autistic child.

**【Discussion/Conclusion】** To our knowledge, this is the first report that demonstrates a process to foster an empathic attitude among classmates’ guardians towards a handicapped child and its parent. The guardians’ attitude led to a class management to create an appropriate relationship between the handicapped child and typically developing classmates. This suggests the importance of guardians in class management and the promotion of inclusive child care.

**【Key words】** inclusive child care, autistic child, empathy, guardian, class management